

網走のメナダとサヨリ

宇仁 義和

099-2493 網走市八坂 196, 東京農業大学オホーツクキャンパス

Mullet and Halfbeak of Abashiri

UNI Yoshikazu

Tokyo University of Agriculture, 196 Yasaka, Abashiri, Hokkaido 099-2493, Japan. uisan@m5.dion.ne.jp

A Mugilidae fish *Chelon haematocheilus* inhabits Abashiri waters (44°0' N, 144°17' E) both of the coastal Okhotsk Sea and brackish water lakes. Catch records, sightings and capture of fry of 20 mm in August 2010 suggested that they inhabit year around, wintering and spawning in Abashiri. And fry of a Hemiramphidae fish *Hyporhamphus* sp. were taken August 2010, as well.

はじめに

ボラ科 Mugilidae 魚類は全世界の温・熱帯域から 2 亜科 17 属 71-72 種が知られ、北海道周辺ではボラ *Mugil cephalus cephalus*, メナダ *Chelon haematocheilus*, セスジボラ *C. Affinis* の 3 種が分布する (瀬能 2001)。オホーツク海沿岸地方では、ボラ科成魚については、ボラがサロマ湖 (東 1998)、斜里町 (野別ら 1998) で採捕されているが少ない。メナダはサロマ湖 (東 1998)、紋別市 (須田 2004)、網走市 (丸山秀佳私信)、斜里町 (野別ら 1998) など記録されている。しかしながら、稚魚や未成魚の捕獲状況、捕獲の季節性はこれまで報告されてこなかった。

本論は、採取記録や漁獲情報からメナダの網走周辺での繁殖や越冬について考察するとともに、サヨリ属 *Hyporhamphus* の稚魚についても若干の報告を行なう。

網走の「ぼら」と漁獲

網走では春から夏にかけて「ぼら」が鮮魚として販売される (渡辺順一, 網走お魚図鑑, 網走漁師日記, http://blog.ohotsuku.com/2009/04/blog-post_07.html, 2010 年 12 月閲覧)。この「ぼら」は形態からメナダと判別される (図 1)。「ぼら」が捕

獲されるのは主として網走湖、能取湖、藻琴湖、濤沸湖での内水面漁業からで、なかでも藻琴湖と濤沸湖での漁獲割合が大きい。網走市が毎年発行している『水産統計』で「ぼら」が立項されているのは内水面漁業であり、濤沸湖では 1986 年まで、藻琴湖では 2001 年まで項目が置かれていた。捕獲時期は 4-6 月と 10-12 月の 2 回に分かれているが、「ぼら」の漁獲がない 7-9 月は内水面の漁業者が海での鱒漁に従事するために捕獲努力がされていないことによる。また 1-3 月は湖面が結水しており、漁業が行われていない。よって漁労活動が行われている時期はいつでも「ぼら」の漁獲があることがわかる。漁獲量は 4 月が最大となっている。

漁獲量の経年的な変化は年変動が大きく、統計が得られた 1962-2001 年の 40 年間では 24 t (1971 年) から販売金額はあるが漁獲量 0 t (1969, 1983, 1985, 1986 年) や販売金額がない 1994 年の 0.0 t まで開きがある。長期的な変化では減少傾向が明らかで 1982 年以降の漁獲は網走全体で多くても 1 t 台となっている。20 年間の漁獲量の平均値は 1962-81 年が 9.35 t であるのに対し、1982-2001 年は 0.46 t とおおよそ 20 分の 1 である (図 2)。

網走漁業協同組合濤沸部会の漁業者に 2010 年 12 月に行った聞き取りによると、濤沸湖や藻琴湖



図1. 網走地方卸売市場に出荷されたメナダ *Chelon haematocheilus*. 「ぼら」として販売されている. 2009年4月7日, 渡辺順市撮影.

の漁業者は, 湖内で捕獲される「ぼら」は「やちぼら」, まず定置網で捕獲されるものを「ぎんぼら」として区別しているが, 「ぎんぼら」は少なく, 獲れてもひと網に1匹から数匹という. 湖では11月から始まる「わかさぎ」や「かわすじえび」用の小型定置網「ふくべ網」では10 cmほどの幼魚が多数捕獲される. また, 春先4-5月の数日間「ぼら」を目的にした刺網漁が操業される. しかし, 20 cm程度の未成魚, 2 cm前後の稚魚は見たことがないという. この漁業者の考えでは, 「やちぼら」は湖内で越冬しているという.

「やちぼら」と「ぎんぼら」の区別については詳しく聞き取りを行わなかったため, この2つの呼

称が形態上の区別なのか, それとも獲れた場所の違いを指しているのか, あるいはその混合なのかはわからない. また, 稚魚や特定の大きさの未成魚が見られないのは, 漁法の影響が大きいと考えられる.

西網走漁業協同組合に2010年12月に行った聞き取りでは, 網走湖では「ぼら」は年中見られ, 10-11月には川を遡上する魚を確認しており, 全面結氷した湖内で行われる「こい」を目的にした刺網漁でも獲れるという.

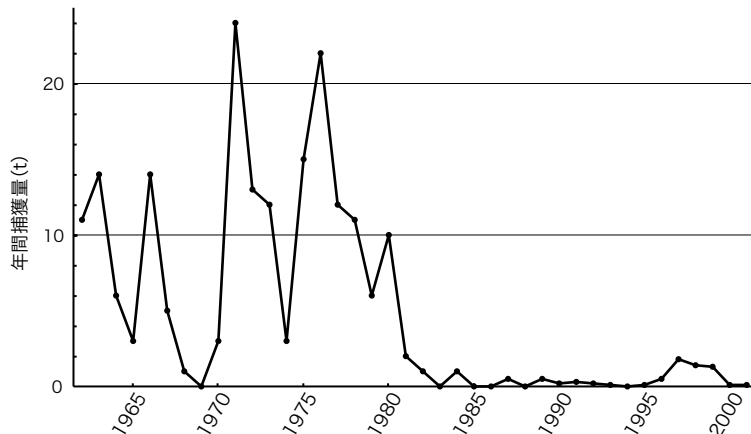
メナダの稚魚

網走では確実な記録が見られなかったメナダを稚魚であるが, 2010年8月8日, 道の駅「流水街道あばしり」付近の網走川下流で2匹の稚魚(全長22 mm, 20 mm)を採取した(図3). 銀びかの体色で数十匹の群れで上流に向かって泳いでおり, 非常に目立っていた. 稚魚は9月上旬までは観察でき, 海からのうねりが入ってくる状況になると河口側から遡上してきていた. 偶発的な観察であるので, これ以上の調査はしていない.

サヨリ属の稚魚

サヨリ科 Hemiramphidae の魚類は日本から6属13種が報告され, 北海道南部以南にサヨリが分布するとされる(藍澤2001). サヨリはオホーツク海南部ではサロマ湖で漁獲対象になっており(東1998), 幼魚(野別ら1998)が記録されている. 日

図2. 1962-2001年の網走市の「ぼら」の年間漁獲量(t). 前半20年間は年変動が大きい, 1980年代以降は急減し, 1982年以降は多くても1 t代で推移している. 1962-81年の20年間の年間漁獲量は平均9.35 tに対し, 1982-2001年の20年間は0.46 tである. 網走市『水産統計』より作成.



本海側北部の利尻島や礼文島の漁港では1989年頃の秋に4-5 cmの幼魚が多数観察されている(丸山秀佳私信)。稚魚については記録がなかったが、2010年8月18日にサヨリ属の稚魚2匹(全長29 mm, 27.5 mm)が網走川下流の道の駅「流水街道あぼしり」付近において、たも網で採取されている(図4)。また、8月21日には北見市常呂町栄浦のライトコロ川で12 cmほどのサヨリの幼魚を多数観察した。

オホーツク海南部でのサヨリ属の稚魚はめずらしいと考え、記録しておく。

考察

オホーツク海南部のメナダの報告はこれまで成魚や未成魚に限られており、稚魚は記録されてこなかった。これは魚類学や水産学の研究者による調査方法による制限と考えられる。たとえばオホーツク海側の紋別では、2005年10月の調査で全長12-26 cmのメナダ未成魚4個体が採集されているが、稚魚の採集はなかった。ただし、この調査で用いた地曳網では、他の魚種も含め全長5 cm未満の個体はほとんど獲れなかった(須田有輔私信)。稚魚が捕れない理由に器具の選択性も関連しているかもしれない。

一方、網走の内水面漁業者はメナダを周年観察し、秋には当歳魚を捕獲していたが、産卵場所が推定できる時期や大きさではなかった。2010年夏に20 mm前後の稚魚が採取されたことで、メナダが網走に周年生息し、この海域で再生産も行なっていることが初めて示唆されたと考える。ただし、網走で観察されるメナダが周年生息する単一個体群か、それとも南方からの回遊個体も加わっているのかを判断するには今後の調査が必要である。

越冬場所については、漁獲時期や漁業者の観察から濤沸湖や藻琴湖、そして網走湖などの汽水湖と推測される。オホーツク海は冬季は流水に覆われるが、そのような環境でも沿岸の汽水湖が越冬環境を提供することでメナダの周年生息を可能にしているのかもしれない。その場合、汽水湖への生態学上の役割が改めて評価されることになるだろう。



図3. 2010年8月8日に網走川下流で採取されたメナダ *Chelon haematocheilus* の稚魚(全長22 mm, 20 mm)。



図4. 2010年8月18日に網走川下流で採取されたサヨリ属 *Hyporhamphus* の稚魚(全長29 mm)。

漁業については、漁獲統計上は1980年代以降の減少が顕著であるが原因は不明である。考えられる要因は、漁獲努力漁の低下、生息数や生息密度の減少、統計上の操作などさまざまな理由が考えられ、精査が必要である。

以上のことから、網走の「ぼら」については以下のようにまとめられる。網走の市場にでまわる「ぼら」の多くはメナダであり、漁獲は汽水湖での漁労活動が行われる時期であればいつでも捕獲され、網走湖の氷下漁でも捕獲されることから、少なくとも一部の個体は網走周辺に周年生息していると考えられる。越冬場所は網走湖や濤沸湖、藻琴湖などの汽水湖と推測される。おそらく毎年、少なくとも2010年の夏は網走付近で繁殖し、産卵時期は7月頃と考えられる。

おわりに

メナダはボラよりも上品で美味とされる(藤原昌高, メナダ, ぼうずコンニャクの市場魚貝類図鑑, <http://www.zukan-bouz.com/boramoku/menada.html>, 2010年12月閲覧)。網走では漁獲量も少なく雑漁扱いであるが、「泥臭い」として敬遠されることもあるボラではなく、清麗な環境で育った「網

走のメナダ」)として市場に提供することも可能であり、新たな漁業資源としての活用も考えられるだろう。その場合、生息環境の保全と利用の両立を果たしてほしい。

近年、オホーツク海南部では南方系魚類の出現が以前より多く報告されている。網走市東端の濤沸湖北浜湖口では2002年頃からシモフリシマハゼが見られるようになり(小長谷2006)、今年2010年も観察されている。知床半島東側の羅臼町では10月5日にシイラ未成魚2tが捕獲され(桜井憲二、シイラ大漁!。知床桜, <http://blogs.yahoo.co.jp/oowashidayo/19891804.html>, 2010年12月閲覧)、11月13日にはトラフグが捕獲された(桜井憲二、とらフグ。知床桜, <http://blogs.yahoo.co.jp/oowashidayo/21013620.html>, 2010年12月閲覧)。ウバザメの混獲や漂着もあった。9月30日に紋別沖の秋サケ定置網に体長6.3 m 体重2.5 tの個体(北海道新聞, 2010年10月1日朝刊オホーツク面)、11月4日には斜里町朝日町の海岸に体長8.15 mの雄1匹が漂着している(村上ら2011)。

ただし、南方系魚類の出現が多発するのは近年に限ったことではない。1940年頃の斜里町はマグロの豊漁に沸き、1941-43年は魚種別生産額の1-2位を占め、1941年は131 t、1943年は141 tの漁獲があった(斜里漁業史編纂委員会1979, 268-169)。よって、近年の南方系魚類のひんばんな出現が気候変動によるものか、それとも50-100年単位で見れば通常の変動の範囲なのかを判断するのは、いまのところ困難である。

謝辞

本論をまとめるにあたり、次の方々にお世話になりました。お礼申し上げます。渡辺順市、長井寿公、丸山秀佳、須田有輔、西網走漁業協同組合、網走市役所水産港湾部水産漁港課、網走市立図書館(敬称略・順不同)。

引用文献

- 藍澤正宏. 2001. ダツ目 Beloniformes. 岡村収・尼岡邦夫(編・監), 日本の海水魚(第3版). 山溪カラー名鑑. pp 150-153. 山と溪谷社, 東京.
- 東幸兵. 1998. サロマ湖の魚類について. 美幌博物館研究報告6: 1-10.
- 小長谷博明. 2006. 栽培公社発アクアカルチャーロード: どんな魚を見てきたか; 魚好きの備忘録. 育てる漁業401: 3-5.
- 斜里漁業史編纂委員会(編). 1979. 斜里漁業史. 786 pp. 斜里漁業史編纂委員会, 斜里町.
- 須田有輔. 2004. 北海道オホーツク紋別海岸の砂浜魚類相. 64 pp + 3 tables. 私家版, 下関.
- 瀬能宏. 2001. ボラ目 Mugiliformes. 岡村収・尼岡邦夫(編・監), 日本の海水魚(第3版). 山溪カラー名鑑. pp 147-149. 山と溪谷社, 東京.
- 野別貴博・中川秀人・矢部衛・仲谷一宏・増田泰・尼岡邦夫. 1998. 知床半島沿岸の魚類相. 知床博物館研究報告19: 1-22.
- 村上隆弘・増田泰・藤澤雅樹. 2011. 斜里町のウバザメ漂着事例. 知床博物館研究報告32: 35-36.